

ラーニング・コモンズをもっと知るために：  
図書と雑誌論文の紹介

Recent Books and Articles on Learning Commons

東北大学附属図書館  
Tohoku University Library

加藤 信哉  
KATO, Shinya

Abstract

This article reviews recent books and articles on Learning Commons.

Keywords: Learning Commons (ラーニング・コモンズ), Book Review (文献紹介)

1. はじめに

2006年に我が国に初めてラーニング・コモンズを紹介した米澤は、ラーニング・コモンズが出現した背景を「学部教育の新たなパラダイム転換，すなわち学習理論が『知識の伝達』から『知識の創出・自主的学習』に移行したこととともに，顧客層の鮮明化の必要性という要因」に求め、ラーニング・コモンズを「ネット世代の学習支援を行う図書館施設もしくはサービス機能」と定義し、ラーニング・コモンズの事例として米国のマサチューセッツ大学アマースト校、マウント・ホリヨーク大学と英国のウォーリック大学を紹介している<sup>1)</sup>。また、茂出木はラーニング・コモンズを「簡単にいえば、学習の場としての大学図書館を象徴する施設モデルであり、電子ジャーナルに代表される電子的な学術情報資源の普及により起こった「図書館不要論」や入館者の減少という大学図書館の危機に対する図書館側からの解決提言とも言える。」と説明し、見学に基づきラーニング・コモンズの事例として米国のマサチューセッツ大

学アマースト校とマウント・ホリヨーク大学を紹介している<sup>2)</sup>。

本稿では、ラーニング・コモンズについて書かれた英語の図書を紹介するとともに従来の日本語の文献では余り紹介されてない、インフォメーション・コモンズとラーニング・コモンズの違い、インフォメーション・コモンズ発達の経緯、図書館ユーザとしてのネット世代、ラーニング・コモンズ導入後の大学図書館の変化についての一部の論文を紹介する。

なお、本稿では特に断らない限りインフォメーション・コモンズとラーニング・コモンズは同じ意味を持つ用語として使用する。また、Information Commonsの訳語として使われる「情報コモンズ」は、「社会の存続にとって不可欠な情報の共有とフェア・ユース(fair use)の推進を説く動き」として説明されることがあるので<sup>3)</sup>インフォメーション・コモンズという用語で統一する。

## 2. ラーニング・コモンズに関する図書

先ず、ラーニング・コモンズに関する図書として2006年に出版されたBeagleの「インフォメーション・コモンズハンドブック」<sup>4)</sup>を上げるべきであろう。本書は、インフォメーション・コモンズが何であるかのみならず、大学図書館におけるインフォメーション・コモンズの役割についても説明し、インフォメーション・コモンズの計画と設計の実務側面も扱っている。付録のCD-ROMには10機関(米国のブルックデール・コミュニティ・カレッジ、シャーロット・ラテン語学校、コロラド州立大学、エロン大学、トロント公共図書館およびノースカロライナ大学シャーロット校、カナダのカルガリー大学、ニュージーランドのオークランド大学、ドイツのブランデンブルク工科大学、オーストラリアのサンシャイン・コート大学)成功事例について図面や写真等のドキュメントが含まれているので資料的価値も高い。

著者は、p.xviiiでインフォメーション・コモンズを「学習の支援の中で組織化され、一群のネットワークのアクセスポイントと関連するITツールで、物理的資源やデジタル資源や人的資源や社会資源との関連で配置されたもの」とし、一方、ラーニング・コモンズを「インフォメーション・コモンズの資源が他の大学の他の部署が出資する学習イニシアティブと協力して組織化されるか、協力過程(collaborative process)を通じて規定された学習成果と協力する場合のできごと」と定義している。

本書がインフォメーション・コモンズの計画、実施および評価を歴史的背景や大学との関係で体系的に調査したハンドブックであるのに対して、事例研究を通じて成功しているインフォメーション・コモンズの試行を跡付けた図書が2008年に出版されたBaileyとTierneyの「インフォメーション・コモンズによる図書館サービスの変容」<sup>5)</sup>である。「インフォメーション・コモンズとラーニング・コモンズの定義」、「計画」、「実施」、「評価」の章に続き、本書の大半を占めるのは、北米の「大規模大学図書館(アリゾナ大学、ブリガムヤング大学、カルガリー大学、カリフォルニア・ポリテクニク大学サンルイスオビスコ校、ジョージア大学、ゲルフ大学、インディアナ大学ブルーミントン校、マサチューセッツ大学アマースト校、ミ

ネソタ大学ーツインシティーズ、ノースカロライナ大学シャーロット校、南カリフォルニア大学、南メイン大学、ヴィクトリア大学)の事例研究」と「小規模大学図書館(アビリーン・クリスチャン・ユニバーシティ、アズベリー神学校、カールトン・カレッジ、シャンプレイン・カレッジ、ディクソン・カレッジ、セントピーターバーグ・カレッジ)の事例研究」の章で取り上げられた20のインフォメーション・コモンズの事例研究である。事例研究は各機関の担当者が執筆しているが、最初にインフォメーション・コモンズの概要の表があり、同じ構成で比較が容易になっている。また、写真や図もある。最後に「実践から学ぶ」がまとめの章として付いている。

2008年に出版されたSchaderを編者とする「ラーニング・コモンズ：進化と共同の本質的要素」<sup>6)</sup>は2006年4月に開催された「第11回カリフォルニア大学・研究図書館会議」のラーニング・コモンズについて事前会議の発表がきっかけとなったものである。本書は11章から構成され、最初の章「インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズと学習空間へ：進化の背景」でラーニング・コモンズ発展の経緯を述べ、最後の章で「Facebookを超えて：ソーシャル・ネットワークとしてのラーニング・コモンズを考える」で今後の進化を予想しているが、残りの9章はそれぞれがテネシー大学ノックスビル校、カルガリー大学、カリフォルニア州立大学サンマルコ校、グラスゴー・カレドニア大学、オハイオ大学オールデン図書館、スタンフォード大学医学部、ヴィクトリア大学、ジョージア工科大学およびオークランド大学のラーニング・コモンズの詳細な事例報告である。

なお、ラーニング・コモンズの関連では、2006年に出版されたOblingerの「学習空間」<sup>7)</sup>が重要である。本書は、利用者中心の学習空間の哲学的根拠を調査したもので「学習者の期待が、そのような空間、学習を容易にする原則、活動および学習環境を作成する側から見たテクノロジーの役割にどのような影響を及ぼすか」に重点を置いている。この論文集には米国と世界の「革新的な学習空間」の30の事例研究が含まれている。本書は電子ブックとしてEDUCAUSEのウェブサイトから無料でダウンロードできる。

また、2008年に出版された Herson と Powell の「キャンパス情報サービスの融合と共同」<sup>8)</sup> は、ラーニング・コモンズに限らず、大学の使命と密接に結びつくための大学図書館と大学の他の部署やサービスとの融合と共同について調査を行ったものでカリフォルニア大学アーバイン校、ジョージア工科大学、ミシガン大学ディアボーン校、カルガリー大学、マサチューセッツ大学、ジョージア大学、コロンビア大学、イェール大学、サフォーク大学および農業ネットワーク情報センターの事例が報告されている。カルガリー大学、マサチューセッツ大学およびジョージア大学はラーニング・コモンズの事例である。

### 3. ラーニング・コモンズに関する雑誌論文

#### 3.1 インフォメーション・コモンズとラーニング・コモンズの違い

Benett の「論説：インフォメーション・コモンズあるいはラーニング・コモンズ：私たちはどちらを持つのか？」<sup>9)</sup> は、インフォメーション・コモンズとラーニング・コモンズの根本的な相違は、前者は機関の使命を支援するが後者はそれを制定することであると指摘する。

また、著者は大学の使命 (mission) を支援するが、制定できない図書館員や大学コンピューティングの担当者のみではラーニング・コモンズを設置することができないとし、ラーニング・コモンズの成功は図書館や大学コンピューティングのような支援・サービス部署による協力的行動ばかりではなく、当該機関の学習目標を策定している大学の部署の関与によって決まると主張している。

さらに、ラーニング・コモンズの設計に当って、その空間に何があるべきかではなく、その空間で何が起こるべきかを質問することから始めなければならないと述べている。

#### 3.2 インフォメーション・コモンズの発達の経緯

Spencer の「新しいモデルへの進化：インフォメーション・コモンズ」<sup>10)</sup> はインフォメーション・コモンズの考え方の発展を跡付け、1990年代の「レファレンス再考」サービスへの動きが、「場所としての図書館」運動と交差し、この衝突がテクノロジーの変化と利用者の期待と結びつき、インフォメーション・コモンズ・モデルをもたらした

と指摘している。

また、著者はインフォメーション・コモンズ・モデルの将来の拡張の方向性として、(1) 学部学生のみならず大学院生や教員に最もうまくサービスするためのインフォメーション・コモンズの導入あるいは拡張の方法、(2) 他の部門との連携の制限、商業パートナーとの新しいサービスの開発、図書館との連携、(3) インフォメーション・コモンズと図書館の関連のあり方、デジタル・インフォメーション・コモンズの可能性、(4) 現在のモデルのテクノロジー重視の妥当性、特殊コレクションやアーカイブのような専門化されたサービスや非デジタル資料とインフォメーション・コモンズの親和性、(5) 新しい研究環境によるレファレンス・インフォメーション・サービスの根本的変革の可能性や必要とされるスキルやコンピテンシー、を示唆している。

#### 3.3 図書館ユーザとしてのネット世代

McDonald と Thomas は「視点：図書館文化と新世紀世代の価値との断絶」<sup>11)</sup> で大学図書館が次世代の学生にとって適切であり続けるために、大学図書館はテクノロジー、方針、機会の三つの面で変革を検討しなければならないと主張する。

著者は大学図書館の哲学に関する基本的な課題は、大学図書館が利用者の方向に沿ってどの程度動くべきか、そして利用者は大学図書館が示す方向に沿ってどの程度動くかを予期すべきかであると指摘する。さらに、大学図書館は競争と電子化によって変化したが、それはインフォメーション・コモンズに見られるように場としての図書館に顕著であるが、残念ながら仮想インフォメーション・空間でのサービスの点では、図書館による利用者のニーズへの支援が古い価値に固執したまま行われているので、オンライン利用者は図書館が提供しているものにさえ気がついていないことが多いと述べている。

#### 3.4 インフォメーション・コモンズと学習との関連

Lippincott の「インフォメーション・コモンズを学習に結び付ける」<sup>12)</sup> は「学習空間」<sup>7)</sup> の第7章に当り、インフォメーション・コモンズ概念を調査し、その特徴を説明し、インフォメーション

ン・コモンズと学習の結び付きについて焦点を当てることにより、大学の学術目的を支援するスペースの確保を選択するインフォメーション・コモンズの計画に携わっている関係者に役立つ情報を提供している。

著者はインフォメーション・コモンズが情報サービスではなく、利用者サービスであることを強調し、その全体目標が作業の切れ目のない環境を提供することにより、キャンパス・コミュニティのサービスを改善することであると述べている。また、インフォメーション・コモンズは図書館を超えるモデルであり、改修された図書館内に設置されることが多いにせよ、新しい建物や図書館以外の建物に設置されていることを紹介している。なお、最後に「インフォメーション・コモンズの計画」と「計画者への重要な質問」のチェックリストが付いている。

### 3.5 米国大学図書館のラーニング・コモンズ導入の現状と影響

Daniels と Barratt の「ラーニング・コモンズに共通するものは何か？この変化する環境でレファレンス・デスクを見ると」<sup>13)</sup> は、インフォメーション・コモンズやラーニング・コモンズ環境におけるレファレンス・サービスの現在と将来の動向についての意見を知るために米国の大学図書館員を対象にして2008年9月に行ったアンケート調査(質問数17, 回答147件, 分析対象137件)を集計し、分析したものである。

回答事項の分析は、ラーニング・コモンズで提供されるサービス、デスクの名称、ラーニング・コモンズにおけるレファレンス・デスクへの担当者配置、MLIS〔図書館情報学修士課程〕プログラムと新しい図書館員のスキル、ラーニング・コモンズがレファレンス・デスクに与えるインパクト、ラーニング・コモンズの成功、ラーニング・コモンズの課題およびラーニング・コモンズに関連した不安の8項目である。

分析結果のうち、ラーニング・コモンズがレファレンス・デスクに与えるインパクトは「レファレンス・デスクでの局所変化ではなく、図書館の性格の一般的变化が大きく」、<sup>14)</sup>「ラーニング・コモンズの新しい空間が学生生活と共鳴しつつあり、良くも悪くもにぎやかで活動的な場所となってい

る」と説明されている。次に、ラーニング・コモンズの成功は、「図書館における人の出入りの増加であり、学生はそこで提供される新しいサービスや技術や共同作業空間を活用するため図書館に戻ってきたが、騒音の増加がコモンズで直面している最大の課題である」と述べている。さらに、ラーニング・コモンズの課題は「図書館員とIT専門家の間、場合によっては図書館員自身の間のサービス哲学の破壊」であり、「ラーニング・コモンズは、図書館やIT部門やキャンパスの他の大学の部署の間の一体となった取り組みの役割を果たすので、これらの空間についての包括的なミッションやアイデンティティへの合意への到達は簡単ではなく」、<sup>15)</sup>「生産性ソフトウェアやその他のテクノロジーによって学生を効果的に支援するため担当者のスキルを最新の状態に維持することに不安」があり、「ラーニング・コモンズの空間が古くなると、コンピュータやソフトウェアを更新し、突き詰めるとキャンパスの技術センターとしてのコモンズの位置を維持するための資金を獲得が難しく」、<sup>16)</sup>「図書館員は他の非図書館部署と連携するので、ラーニング・コモンズの出来事についてコントロールのレベルが減少する」ことが挙げられている。

### 4. おわりに

本稿では、ラーニング・コモンズについて書かれた英語の図書と論文を紹介した。我が国の大学図書館におけるラーニング・コモンズは揺籃期にあるので、諸外国のラーニング・コモンズの広範な紹介と包括的なレビューが今後まとめられることを期待したい。

#### 引用文献

- 1) 米澤誠. 動向レビュー：インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ：大学図書館におけるネット世代の学習支援. カレントアウェアネス. 2006, no.289, p.9-12.
- 2) 茂出木理子. ラーニング・コモンズの可能性：魅力ある学習空間へのお茶の水女子大学のチャレンジ. 情報の科学と技術. 2008, vol.58, no.7, p.341-346.
- 3) 坂田仰. 動向レビュー：情報コモンズ：情報基盤の私事化と民主主義の健全性. カレントアウェアネス. 2004, no.282, p.7-10.
- 4) Beagle, Donald Robert. The Information Commons Handbook. Neal-Schuman, 2006. 247p.

- 5) Bailey, D. Russell; Tierney, Barbara Gunther. Transforming Library Service through Information Commons: Case Studies for Digital Age. American Library Association, 2008. 155p.
- 6) Schader, Barbara. eds. Learning Commons: Evolution and Collaborative Essentials. Chandos Publishing, 2008. 435p.
- 7) Oblinger, D.G. ed. 2006. Learning Spaces. EDUCAUSE, 2006. <http://www.educause.edu/learningspaces>, (accessed 2009-01-31)
- 8) Herson, Peter; Powell, Ronald R. ed. Convergence and Collaboration of Campus Information Services. Libraries Unlimited, 2008. 240p.
- 9) Bennett, Scott. Editorial: The information or the learning commons: which will we have? Journal of academic librarianship. 2008, vol.34 no.3, p.183-185.
- 10) Spencer, Mary Ellen. Evolving a new model: the information commons. Reference Services Review. 2006, vol.34, no.2, p.242-247.
- 11) McDonald, Robert H.; Thomas, Chuck. Disconnects between library culture and Millennial Generation values. EDUCAUSE Quarterly. 2006, vol.29 no.4, p.4-6.
- 12) Lippincott, Joan K. "Linking the information commons to learning". Learning Spaces. Oblinger, D.G. ed. EDUCAUSE, 2006. <http://educause.edu/books/635>, (accessed 2009-01-31)
- 13) Daniels, Tim; Barratt, Caroline Cason. "What is common about learning commons? A look at the reference desk in this changing environment". The Desk and beyond: Next Generation Reference Services. Steiner, Sarah K; Madden M. Leslie. eds. ACRL, 2008, p.1-13.